

令和4年度 奈良県立橿原高等学校 学校評価総括表

年度	令和4年度（中期計画1年目）
本校の使命 (スクール・ミッション)	「橿高リベラルアーツ教育」 多分野にわたる教科学習や学校行事、部活動など、すべての教育活動を互いに関連付けて実施することで、物事を多角的に見る力と多様性を理解する力を磨き、自ら課題を発見し、それを主体的かつ協働的に解決する能力を身に付けたより良い未来の社会の担い手を育てる。

1 スクール・ポリシーの内容

教育方針 (スクール・ポリシー)	入学者の受け入れに関する方針 (アドミッション・ポリシー)	本校では、以下のような生徒を積極的に受け入れます。 1 本校の使命や教育方針を理解する生徒 2 何事に対しても分け隔てなく、好奇心と探究心をもって取り組み、自らの可能性を広げるために努力する生徒 3 常に高い目標をもち、失敗を恐れず何事にも全力で挑戦し、自己実現を目指す生徒 4 多様な生き方・考え方を尊重し、節度をもって行動する生徒
	教育課程の編成及び実施に関する方針 (カリキュラム・ポリシー)	本校では、教職員と生徒が一体となって信頼と愛情に満ちた明るい学園をつくり、心身ともにたくましく心豊かな若人を育てるため、以下の教育を行います。 1 生徒一人一人の興味関心に幅広く対応できるカリキュラムを編成します。 2 校内外における生徒の様々な活動とおして多種多様な集団と協働する力と豊かな人間性を育成します。 3 課題探究型の学習活動を推進し、主体的で論理的な思考力を養い、自己実現に向けて不断の努力を積み重ねることができる生徒を育みます。 4 特色ある学校行事や課外活動などを設定し、生徒のグローバルマインドセットを養い、国際社会に対応できる能力を涵養します。 5 地域との連携と協働を推進し、生徒のもの見方・感じ方・考え方を豊かにするとともに、自己の有用性を自覚させ、生き生きと活動する態度や前向きに思考する姿勢を醸成します。 6 ゲストティーチャーを招聘し、生徒が本物の生きた体験を学ぶことで、社会で働くことの意義について深く考える機会を提供します。 7 教員は、生徒の深い学びを支えるため、常により良い授業を目指し日々改善を重ね、幅広い知識と教養を身に付けます。
	育成を目指す資質・能力に関する方針 (グラデュエーション・ポリシー)	本校では、卒業までに、以下の資質・能力の育成を目指します。 1 自己の可能性を最大限に広げるために、何事に対しても主体性をもって挑戦し、粘り強く取り組むことができる。 2 社会の急速な変化に対応しながら、様々な事柄に興味・関心をもち、真理の探究に向け学び続けることができる。 3 多様性を認め、他者との協働を重んじ、自ら課題を見いだしその解決に向けて力を尽くすことができる。

2 奈良県教育振興基本計画（「奈良の学び推進プラン」）が示す各テーマごとの学校教育目標

テーマ	学校の教育活動に関する目標 (A)	計画期間における具体的目標 (B)	令和4年度末の目標値等 (C)	令和4年度末の状況 (D)	自己評価 (E)	学校関係者評価 (F)	改善方策(案)
1. こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ	食育の推進	朝食摂取率 90%以上	朝食摂取率70%以上	朝食摂取率79%であったが、20%以上は毎日摂取できていない生徒がいる。中でも「食べない」生徒が全体で6%いるので方策を検討していかなければならない。	A	朝食を摂取する習慣は極めて重要であることから、9割以上の摂取率を目指して欲しい。	朝食摂取率の向上を目指し、家庭科、養護教諭、保健体育科との連携により、食事の重要性を年間を通して伝えていく。
	運動習慣の確立と体力の向上	新体力テスト体力合計点(全8種目)の学校平均偏差値 49.0以上(全国平均、都道府県平均をそれぞれ50としたときの学校平均偏差値。50.0が平均)	新体力テスト体力合計点(全8種目)の学校平均偏差値 45.0以上	新体力テスト体力合計点(全8種目)の学校平均偏差値で、1年女子が43.2、2年女子が44.0と、目標値を越えできなかった。	B		筋力、瞬発力を向上させるトレーニングを授業とおして指導する。
	挑戦心と自律心の向上	文化祭や文化鑑賞会等の文化行事、体育大会や球技大会等の体育行事へ積極的に取り組むことができた生徒がそれぞれ90%以上	文化祭や文化鑑賞会等の文化行事、体育大会や球技大会等の体育行事へ積極的に取り組むことができた生徒がそれぞれ70%以上	新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、制限と工夫を加えて昨年度までに比べ、多くの学校行事を実施することができた。その中で、生徒達それぞれが積極的に取り組むことができていた。「橿高アンケート」より、文化祭78.7%、文化鑑賞会84.6%、体育大会76.3%、球技大会85.6%の生徒が、「満足」「ほぼ満足」と回答した。	A	学校行事の再開はとても喜ばしい。今後は、PTAも参加可能な環境を整備して欲しい。	学校行事の実施において、コロナ禍以前の行事内容の実施を目指すのではなく、生徒や教職員が主体的に考え実行できるように、内容の工夫・改善を加え再検討することで、「挑戦心と自律心の向上」を目指す。
2. 学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ	読書習慣の確立	1年間の読書書籍数が12冊以上の生徒が70%以上	1年間の読書書籍数が12冊以上の生徒が50%以上	読書の時間（SSR・ER）をとおして読書習慣の確立は一定進んでいると思われるが、自主性や冊数の数値的指標は達成されていない。12冊以上（10%）5冊以内（72.3%）であった。	B	読書だけでなく、新聞などから時事問題やニュースへの関心が高められるように取り組んで欲しい。	学校図書活動の活性化や内容を精査し、発信だけでなく、伝達方法を改善することで、読書週間の向上を目指す。また、SSRに一本化し、読書の意義を生徒に再周知することや、全教員が共に取り組むなど具体的な方策をとる。
	自学自習の促進	平日、1時間以上自宅学習する生徒が90%以上	平日、1時間以上自宅学習する生徒が50%以上	平日、1時間以上学校外で学習する生徒の割合は60.4%になり学習習慣が身に付いてきた。今後はさらにその割合を増やす工夫が必要である。	A	課題や宿題を多く出さなくても、自主的に学習するように取り組んで欲しい	BYOD端末を効果的に利用し、家庭学習課題を適切に課すことで、学習内容に興味を持ち、積極的に学習に向かう姿勢を養う。
	課題探究型学習活動の推進	興味をもって積極的に授業に取り組むことができた生徒60%以上	興味をもって積極的に授業に取り組むことができた生徒35%以上	興味を持って積極的に授業に取り組むことができた生徒について、2学期末の「生徒授業アンケート」内の「集中して能動的に授業に取り組んでいる」生徒の割合が82.7%となり、研究授業等による授業改善の結果が現れてきた。今後は探究的学習による問題解決型の授業の積極的な導入を推進していきたい。	A	「課題探究型学習活動」の内容を具体化して欲しい。	教科間の連携を図ると共に、「総合的な探究の時間」も活用し教師の専門性を生かした授業の工夫をすることで、「課題探究型学習活動の推進」を図る。
	指導と評価の一体化を進めることによる授業改善	すべての教科において単元テストを月1回以上実施し、その都度教科会議をもち分析と検証を行う。	すべての教科において単元テストを学期に2回以上実施し、その都度教科会議をもち分析と検証を行う。	評価の機会を増やすため、各教科において単元テスト等様々な評価方法を設定し、指導と評価の一体化を進めることができた。生徒や教師に過度な負担がかけられないように、さらに評価法等の工夫を継続することが必要である。	A	評価の多様化に伴い、評価をどのように指導改善に繋げるかを考えていって欲しい。	シラバスを元に教科間で授業内容等の情報交換を密にし、各学年クラスでの学習状況を把握した上で評価の機会を負担が過度にならないように工夫しながら増やしていくことで、指導と評価の一体化を進めていく。
3. 働く意欲と働く力をはぐくむ	キャリア教育の推進	キャリアパスポートを効果的に活用する。インターンシップ等職業体験学習を推進する。	キャリアパスポートの活用満足度が50%以上。県推奨のインターンシップ等に複数名が参加する。	キャリアパスポートを各学期の生徒たちの取組の振り返りのために活用した。活用満足度が75.6%と目標値を大きく上回った。インターンシップ等職業体験学習の推進については、県推奨のキャリアサポートセンターから紹介される内容を全生徒に紹介した結果、自主的に参加する生徒が複数名いた。	A	インターンシップ等へ自主的に参加する生徒をどのように増やしていくかが課題である。	探究的な活動を含めた「進路DS」や各進路講演会等の内容の振り返りを、更に充実させる。長期休業を活用して、県推奨のインターンシップ等に積極的に参加を求める。また、教育連携校を中心にアカデミックインターンシップに積極参加を求める。
	高大連携の推進	オープンキャンパスやe-オープンスクール、アカデミックインターンシップに全員年1回以上参加する。「橿高大学」(校内大学模擬授業体験)の充実を図る。	左記オープンキャンパス等のいずれかに参加する生徒の割合が50%以上。「橿高大学」の満足度が70%以上。	生徒全員に対し、オープンキャンパスやe-オープンスクール等に年1回以上参加するように促したところ、参加割合が83.6%と目標値を大きく上回った。また、「橿高大学」の満足度も97.6%と目標値を大きく上回った。	A		全校生徒に対し、自分が求める進路先として可能性のある学校のオープンキャンパス（e-オープンスクールを含める）に参加することを求める。また、教育連携校を中心に「橿高大学」及び相談会のさらなる内容の充実を図る。
	美化活動に積極的に取り組む生徒の育成	校内美化に積極的に取り組む生徒の割合が70%以上	校内美化に積極的に取り組む生徒の割合が50%以上	校内美化に積極的に取り組んだ生徒の割合は83%で、4年度末の目標である50%を達成することができた。働きかけに工夫を加え、さらに数値を向上させたい。	A		生徒への校内美化啓発を一層強化するとともに清掃道具の準備等に万全を期す。日常的に環境整備部員が校内環境美化に気を配り、清掃担当者との連携を密にする。
4. 地域と協働して活躍する人を育てる	コミュニティスクールの運営	学校運営協議会の年度2回の開催	学校運営協議会の年度2回の開催	当初、年度3回を計画していたが、第2回開催を見送ることとなった。	B		学校運営協議会の年度3回の開催を計画する。
	国際理解教育の推進・グローバルマインドの育成	全生徒が在学中に国際理解に関わる取組に参加する。	各学年1回以上国際理解に関わる取組に参加する。(第1学年:台湾の文化学習 第2学年:留学生との交流 第3学年:台湾交流校との手紙のやり取り)	国際理解教育の推進・グローバルマインドの育成について、各学年が目標とした取組を実施することができた。次年度さらに充実した内容となるよう努める。	A		国際理解教育の推進・グローバルマインドの育成について、できるだけ早い時期に各学年と連携し、内容の検討・充実を努める。
	地域社会を支えるリーダーの育成	地域と関わる生徒会活動を年間5回以上行う。	地域と関わる生徒会行事を5回行う。	新型コロナウイルス感染症の影響により、1回（橿原警察と連携しての「自転車マナーアップ隊」）しか実施できなかった。	C	コロナ禍による影響によるものなので、C評価でなくとも良いのではないかと。	「地域社会を支えるリーダーの育成」を目指した学校行事等を、実施可能な範囲での計画・立案を進めていく。
5. 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる	地域防災への主体的な取組	地域防災についての理解度の向上	地域防災についての理解度の向上	「地域防災についての理解度の向上」については、残念ながら取り組めなかった。	C		「地域防災の理解度向上」について、具体的な計画を示した上で、次年度に期待する。
	多様性の尊重	人権問題解決に前向きな生徒の割合が75%以上	人権問題解決に意欲的な回答が70%以上	3年人権学習アンケートにおける「人権問題解決に前向きな生徒の割合」が75.5%であり、目標の70%以上は達成できた。今後さらに数値を向上させていく必要がある。	A		「多様性の尊重」を推進するために、人権HRや講演会の内容について、生徒の内面に強く響いて積極的に活動できるような題材や講師を選定する。
	望ましい人間関係の構築・共生	全生徒が在学中に地域へのボランティア活動に参加する。	通学路清掃やあいさつ運動を学期ごとに行う。	生活委員のあいさつ運動は各学期実施できた。コロナ禍の影響で大きな声を出すことなどを制限されてきた生徒たちの明るさを取り戻すため、引き続き実施していきたい。地域でのボランティア活動については、通学路清掃等を実施しているが、コロナ禍前比べると回数は減少している。	B		校門前での教員による立明指導の機会を増やし、教員からの働きかけを行う。また、地域へのボランティア活動には、生徒会を中心に生徒へ働きかけると共に、部活動においても取り組むなど地域との連携をはかる機会をつくることで、「望ましい人間関係の構築・共生」を推進する。

自己評価 (E) は、以下を基準とする。A: (C) を上回っている B: (C) と同程度である C: (C) を下回っている

3 評価結果の分析、今後の改善方策等

今年度末の状況及び学校関係者評価、校内総括会議からの報告等から、各項目について改善方策（案）を作成した。年度当初、コロナ禍の状況での計画であったことから、実施ができなかった項目や縮小等の対応により実施した取組もあった。令和5年度の目標等については、コロナ禍に対する規制緩和に対応しながら、新学習指導要領やBYOD、電子黒板の活用等による学習環境の変化に対応すると共に、長年本校が取り組んできた事業に改善と新しい発想を加え設定していくこととする。

3か年の中期計画を元に、「令和4年度末の目標値等（C）」を設定していたことにより、初年度から「計画期間における具体的目標（B）」を上回る結果が報告された取組があった。このことから、令和5年度当初において、一部「計画期間における具体的目標（B）」を変更することとする。

2月実施の橿高アンケート（学校生活アンケート）において、設問「学校生活に満足していますか。」に対し、「大いに満足している」が19.4%、「ほぼ満足している」が58.3%と回答している。また、保護者アンケート（12月実施）においても、「入学させてよかったですか。」の問いに対し、「よくあてはまる」が52.2%、「ややあてはまる」が41.0%であった。

令和5年度に向けての改善方策としては、それぞれの取組に対して、1つの担当分掌等だけで取り組むのではなく、横の繋がりを意識した多分掌による相談・協力体制により取り組んでいくこととする。